



## JAPANESE LANGUAGE EDUCATION METHODS

第 52 回 日本語教育方法研究会  
杏林大学井の頭キャンパス(東京都三鷹市)  
2019 年 3 月 23 日(土)

3 月 23 日に杏林大学井の頭キャンパスで第 52 回研究会を開催いたします。今回も昼食交流会を企画しました。会場で昼食をとりながら、自由に楽しく意見交換をしていただければと思います。是非とも多数の方々にご参加いただけますよう、ご案内申し上げます。

会長 河野俊之

TABLE 1 第 52 回研究会開催について

日 時 :	2019 年 3 月 23 日(土)
会 場 :	杏林大学井の頭キャンパス
開催委員 :	嵐洋子、倉林秀男、八木橋宏勇 (杏林大学) 中川健司 (事務局: 横浜国立大学)

TABLE 2 開催スケジュール

午前		午後	
9:15	受付 (発表者・一般) ポスター貼付	1:00	口頭発表開始
10:00	開会の挨拶	1:50	ポスターセッション 2 開始
10:05	会の進め方の説明	3:05	ポスターセッション 2 終了
10:10	口頭発表開始	3:20	ポスターセッション 3 開始
10:40	ポスターセッション 1 開始	4:35	ポスターセッション 3 終了
11:55	ポスターセッション 1 終了 午後のポスター貼付	4:40	講評・JLEM 賞発表 次回開催委員挨拶
12:00	昼食交流会開始 (~12:50)		閉会の挨拶 参加者全員で片付け

### 【参加方法】

事前申し込みは必要ありません。直接会場においでください。非会員の方でも、会場で手続きをして参加することができます。皆様、お誘い合わせの上、ご参加ください。なお、会場での現金の授受はできるだけ避けたいと思いますので、会員の方、会員になるご予約の方は、事前の会費納入 (p.18 参照) にご協力ください。

新規入会 : 3,000 円 (年会費)

当日のみ参加 : 2,000 円

## 【プログラム】

### 【ポスターセッション1】

#### ●口頭発表（2件）

##### 1. プレースメントのための日本語スピーキングテスト STAR の開発

ボイクマン総子・根本愛子・松下達彦（東京大学）

プレースメントテスト(PT)は、大勢が一度に短時間で受験でき、実施が簡便で、判定の信頼性が高いものが望ましいが、従来のスピーキングテストにこれら要件を全て満たすものはない。そこで、筆者らはスピーキングテスト **Speaking Test of Active Reaction: STAR** と、ループリックと音声サンプルによる評価ツールを開発した。評価ツールを用いた評価者5名の受験生 32 名分の判定を分析した結果、級内相関係数が高く、評価者間で一貫した結果が得られた。1人あたりの判定時間も2分未満と短かった。発表では、**STAR** が **PT** のためのスピーキングテストとして信頼性、妥当性、実用性があることを報告する。

##### 2. 日本語学習者の辞書使用の実態—ライティング時の辞書使用に注目して—

板井芳江・寺嶋弘道（立命館アジア太平洋大学）

日本語学習者が作文を書く際には、コロケーションや例文の情報が得られるコーパスツールの機能が効果的である。しかし、コーパスツールで検索する言葉そのものが作文の文脈に合わなければ、その効果を発揮することはできないだろう。現在、筆者らは優れたコーパスツールユーザーを育てるための教材開発を目指しているが、それを進めるうえでは、学習者の辞書使用に関する研究が必要だと考えている。そこで、本研究では実際に学習者が短文や文章を書く際に使用する辞書やその使用目的、辞書に対して感じている問題を明らかにするために初級から上級レベルの学習者 307 名を対象にアンケート調査をし、その分析を行った。

#### ●ポスター発表（上記2件を含む23件）

##### 3. 中国人学習者における授受表現の非用実態の調査報告

梁穎穎（拓殖大学大学院生）

授受表現は中国語を母語とする日本語学習者にとって習得の難しい学習項目の一つだが、その要因として方向性と視点制約の理解が進まないことが挙げられる。そのため、誤用だけではなく、例えば「先生が書いてくれました」と言うのではなく、「先生が書きました」というような非用がよく見られる。また、小説の中国語版と日本語版と比べても、中国語版では授受表現に関して訳されていないものが多い。これまで、授受表現の誤用については研究が数多く行われてきたが、非用についての研究は少ない。そこで、本研究では、中国人日本語学習者を対象に調査を行い、どのような条件で授受表現の非用が起きるかを明らかにする。

##### 4. 「NHK NEWS WEB EASY」を題材にマルチメディア教室で行う教えない授業の検証

松井一美（早稲田大学）

本発表では、「NHK NEWS WEB EASY」を題材にマルチメディア教室で行っている授業の効果と問題点を報告する。本授業は、履修者が日本語でニュースを読む習慣を身につけ、自立的に学習する力を養うことを目的としており、履修者自身が PC やスマホを駆使して教師が与えた課題を遂行し、ペアワークを行う。授業中、教師はサポートを行うのみで、文型や語彙の説明は行わない。本授業の結果、それまで日本語のニュースを読まなかった履修者が、日本語のニュースを読むようになる等、ニュースを読む習慣の変化やリソース活用に関する効果が窺われる反面、教師が文型や語彙の説明を行わず履修者自身が調べるといった授業形態について賛否が分かれ、問題点もある。

##### 5. 台湾におけるアクティブラーニング形式のディベート授業の試み—学生の論理的思考変化に注目して—

芝田沙代子（東呉大学大学院生）

研究は台湾の日本語学科の大学3年生を対象にアクティブラーニングの形式を用いて行ったディベート授業の実践研究である。その後学習者の論理的思考能力の変化を調査し、分析考察した。授業中、学習者がグループでの作業や自らのディベートの内省、他者の観察から学習者同士でディベートのルールや方法、資料の読み方などの学びが進められた。分析の結果【資料の読み方】【知識面の成長】【協働性】【競合性】【自己変容】という概念

の思考変化が認められた。特に【資料の読み方】の概念では、短い時間にポイントを掴みながら読むことや、資料を利用し、自ら思考することが重要であると理解されて、【協働性】の重要性が際立って認知された。

## 6. 「質問づくり」を用いた口頭発表の授業

世良時子（成蹊大学）

「質問づくり」とは、ロスタインとサンタナ（2015）に基づく手法で、発散思考、収束思考、メタ認知思考を経験させ、学習を深める活動である。本実践では、上級レベルの口頭発表作成の過程において、1）発表内容を深め、整理する、2）発表で用いる質問を含む表現形式に注目する、という目的でこの手法を取り入れた。発表後の振り返りと、発表記録を分析したところ、1）「質問づくり」で得られた問いを発表に用いるかには個人差があるが、「質問づくり」が内容を整理するには役立ったという振り返りが得られた、2）質問を含む表現形式については、授業内で注目させた形式を用いることができるようになっていた、という結果が得られた。

## 7. 英語学位プログラムで学ぶ留学生の就職までのプロセス

—日本での就職を選ばなかった T にとって日本語学習はどのような意義があったのか—

秋田美帆・三上文香・梨本麻理子（東京国際大学）

近年のグローバル化に伴い、英語学位プログラム（English Track 以下 E-Track）を開設する大学が増えてきた。英語で授業を受ける E-Track 生は、日本語習得や日本語での専門科目の学習を主たる目的として来日した留学生とは異なる動機や目的を有していると推測できる。では、彼らが日本語を学ぶ目的、そして日本語を学ぶ意義は何だろうか。発表者らは、上記の問題意識の元に、所属大学において E-Track 生へのインタビューを実施した。本発表では、初級から上級まで継続的に日本語を受講し、日本での就職活動も経験したが、最終的に日本での就職を選ばなかった E-Track 生 T へのインタビューを取り上げる。TEM によるインタビューの分析から、T の就職までのプロセスを示し、その選択に至った要因を明らかにする。その上で、T にとっての日本語学習の意義を考える。

## 8. 日本語が主専攻ではない留学生の日本語使用に対する意識調査

井上正子（芝浦工業大学）・山方純子（早稲田大学）

昨今、専攻の授業や研究では主に英語を使用し、日本語学習を必要としない留学生が増えている。しかし、中には自発的に日本語クラスを受講する学生も少なくない。そこで、彼らの日本語使用に対する意識についてアンケート調査を実施した。日本語が分からずに困った経験を持っていたのは対象者の半数程度で、具体的には学外の日本人とのやりとりや手続き等が挙げられた。こうした問題は、同国出身の友人やクラスメイト等、周囲の力を借りて解決していることも明らかにされた。同時に、日本人との会話から達成感を得る等、日本語使用の有用性も感じていた。これらの結果を踏まえ、教師に何ができるのか、授業内容や援助についても検討したい。

## 9. 協働学習の方法の1つとしての録音の可能性—大人数会話授業での実践報告—

東出朋（国立釜慶大学校）

大学の外国語の会話授業では、大学側の事情による様々な制約から、1 クラスに 40 人以上が登録する大人数クラスが発生することがある。大人数クラスでは、クラス内のレベル差も大きく、学習者のモチベーションも様々である。このような環境では、学習者同士の協働学習を促す必要がある。本発表では、大人数クラスにおける会話授業における活動の1つの案として、会話を録音しそれをお互い修正しあうという協働学習の実践例を報告する。実践後のアンケートを分析したところ、学習方法について学習者は概ね肯定的に捉えていることが分かった。一方、自由記述を分析したところ、心理的な抵抗感を感じる意見も見られた。

## 10. 韓国語母語話者の日本語学習者における「自動詞・他動詞」の概念習得過程の考察~韓国の国語と英語教育課程を中心に~

金ヘイン（横浜国立大学大学院生）

言語学習者が文法項目を習得する際、母語に類似している文法がある場合、一般的に母語の影響で転移が発生することが予想される。しかし、筆者は韓国語母語話者の日本語学習者は「自動詞・他動詞」の概念習得において母語の韓国語より英語の影響が与えられている可能性に注目した。実際韓国語の母語話者は日本語を学習する

前にどのような韓国の国語と英語の文法教育課程を経験し、「自動詞・他動詞」の概念を選手習得しているのかを検討した。

#### 11. L2 日本語学習者の推敲作文におけるペアワークの有効性と個人差

坪田めぐみ（淑徳日本語学校）

本研究は中国語を母語とする中上級日本語学習者 14 名を対象にペアで書いた初稿と教師によって訂正された作文をペアで比較分析することが、その後の個人の第 2 作文（修正作文）の正確さに効果があるか、個別で行った場合と比較検証した。さらに、学習者のペアを上、中、下位群に分けて、学習者ごとの第 2 作文の正確さについて、ペア条件・個別条件の両タスク条件間で比較し、ペアワークの効果进行分析した。その結果、両条件とも第 2 作文の正確さの向上が見られたが、ペア条件の方が大きかった。また、本研究では下位群のペアが最もペアワークの効果が出たが、ペアの L2 習熟度や性別などによる個人差がかなりあることも示唆された。

#### 12. 日本語教師養成講座の受講生が考える類義語の説明の仕方と典型例について

加藤恵梨（大手前大学）

類義語である「たのしい」「ゆかい」、「たのしい」「うれしい」の意味の違いを中級レベルの日本語学習者に説明する際、日本語教師養成講座の受講生がどのような例を挙げ、それぞれの意味についてどのように説明すると良いと考えているのかについて調査し、その特徴について明らかにする。また、受講生が考えるそれらの語の典型例と、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』での使用頻度が高い例との相違点についても提示する。さらに、それらの類義語について学習者に説明する際、どのような例を挙げ、どのように意味の違いを説明すると学習者に伝わりやすいのかについても考察する。

#### 13. 専門分野に即した引用方法の理解を促す活動の試み

中村かおり（拓殖大学）・近藤裕子（山梨学院大学）・向井留実子（東京大学）

大学院の留学生を対象として、専門分野に即した引用方法の理解を促す活動を行った。各自が専門に関わる論文を一編選び、その中の引用箇所と引用目的、そこで使われている表現を指定のフォームに記入したのち、活動についてのアンケートに答えるというものである。その結果、どのような引用形態が学習者にとってわかりにくいか明確になり、この活動が、学習者の論文に対する意識や、引用方法の理解を変えたことも明らかになった。本発表では、活動結果の紹介を通して、このような活動が、専門分野の異なる学習者が存在する場合の対応策として有効であり、引用の実質的理解も促進しうることについて述べる。

#### 14. 音声認識を生かした発音チェックリストとその効果

河野俊之（横浜国立大学）

発表者は以前、対象を特定の母語話者に限定しない発音チェックリストを提案した。そこでは、学習者が発音チェックリストを読み上げたものを教師が評価したものと学習者自身が評価したものを元に、学習者の産出の誤用の多少が、自身のチェック能力と相関がある可能性を示した。その発表の後、スマートフォンなどで、音声認識が容易にできるようになったことから、学習者がそれを用いることで、教師がチェックを行わなくても、発音が向上する可能性があることを示す。また、スマートフォンによるチェックと学習者によるチェック、さらに、それらと教師によるチェックの違いについても明らかにする。

#### 15. 短編小説を教材とする、アウトプットを主眼とした上級授業実践

秋澤委太郎（アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター）

短編小説は多くの日本語授業で生教材として用いられており、学習者の意欲を高めつつ多様な単語・表現・文型の使用実例に触れる機会を提供し、読解力を向上させる効用が指摘されている。本発表では、小説作品に触れて学習者が感じた印象や導出した見解を詳細に述べる、あるいは書くことを中心とした活動によって、読解力にとどまらず、発話力や作文能力の向上をも目指す上級日本語の授業実践について報告する。読者の内面に訴え、それぞれにそれぞれなりの深い感情と思索を喚起せずにはおかないという文学作品の特質を日本語学習に最大限活用するため、教師はどのような方略を用いることができるのだろうか。

## 16.日本語第二言語話者による英語への切り替え・英語表現の混用-第二言語話者同士の雑談の分析-

大津友美（東京外国語大学）

日本語を第二言語とする者同士の雑談を観察すると、日本語で会話が行われる中で、英語への切り替えが起こったり、英語表現が混用されたりすることがある。そのような時に、会話参加者の間では、特に混乱が見られることはなく、スムーズに会話が進む。そのような英語への切り替えや英語表現の混用はどのように行われるのだろうか。ビデオデータを観察したところ、日本語での適切な言葉が見つからず英語を使用する場合には、会話参加者が言葉探しをしていることを言語的に示す、または、身振りや姿勢といった非言語的な合図により、英語の導入が予示されていることがわかった。

## 17.入門・初級の日本語授業における媒介語としての英語使用の実態—授業動画の分析を通して—

嵐洋子・倉林秀男（杏林大学）・田川恭識（日本大学）

日本語の入門・初級の教育では、媒介語を使用しないことを前提としたいわゆる「直接法」が多く取り入れられてきた。一方、海外の日本語教育機関の入門・初級教育では、学習者の母語を使用するケースも多いほか、最近では日本国内でも、特に大学機関において、英語を媒介語として教えるコースも少なくない。そこで、本発表では、媒介語として英語を使用した授業における教師の発話データから、英語がどのような機能で用いられているのかを分析し、日本語の入門・初級の教育における効果的な媒介語使用の方法を検討する

## 18.マルチモーダルなコミュニケーションに重きを置いた日本語支援 Web サイトの開発

本郷智子・山崎真弓・上原真知子（東京農工大学）

教育研究活動のグローバル化に伴う受入制度の改革等により、留学生が来日する時期、期間が多様化している。留学生の来日形態を問わず対応できる日本語支援として、彼らが遭遇する場でのやりとりを中心とした Web サイトを開発した。留学生が自分の持っている日本語リソースを最大限に生かしながらマルチモーダルなコミュニケーションを行い、日本での活動体験を拡充していくこと、また、そういった体験をサイト上で学生同士が共有することで、さらに深化させていくことをねらいとした。本発表では、Web サイトを開発するに至った経緯、開発の目的、コンテンツ概要、期待できる効果、および今後の課題を報告する。

## 19.就職活動のための日本語の授業が卒業後の進路に及ぼす影響

重田美咲（下関市立大学）

学部二年生の留学生を対象とした就職活動のための日本語の授業（2015年度）の受講生に対して、卒業前（2017年度）に、授業内容と就職活動の関連性、受講から進路決定までの過程について半構造化インタビューを行った。調査協力者は中国出身の8名で、二次次には8名中7名が日本での就職希望だったが、日本での就職3名、日本の大学院進学1名、留年1名、母国での就職希望3名という結果になった。この結果には、親の母国での就職支援が大きく影響していることがわかった。また、学習内容が就職活動にそのまま活用できた学習者とできなかった学習者の違い、日本での就職活動にも中国での就職活動にも役立つ学習項目等も明らかになった。

## 20.初級作文コースにおけるブログ・プロジェクト

市村佳子（テンプレ大学ジャパンキャンパス）

本発表は、初級作文コースでのブログ・プロジェクトの実践報告である。「書く」ことは宿題とテキスト・メッセージのやりとりだけという学生が多い中、学生に抵抗感が少ない形で「書く」ことを増やし、「書く」ことに対する苦手意識を軽減することを目的として、初級作文コースでブログを書く活動を取り入れた。投稿内容は週末や趣味などの話題が多く見られた。授業で投稿内容について触れ、コメントを書く時間を取ったところ、コメントのやりとりも行われるようになった。アンケートとインタビューの結果、本活動については高評価だったが、書くことへの苦手意識が軽減したかどうかに関してはばらつきがあった。

## 21.雨は「降りそうにない」のか「降らなさそう」なのか—ソウダ否定表現の扱いと学習者の知識との隔たりに注目して—

宮口徹也（東京福祉大学）

いわゆる様態のソウダは複数の否定表現を持つことで知られるが、一般的な日本語教材において導入されてい

るのは、主にソウデハナイ、ソウニ（モ）ナイの2つである。ソウダの否定表現には、これらに加え「降らな（さ）そうだ」のように、動詞の否定形に直接ソウダを接続させた形（Vナ（サ）ソウダ）もあるが、これは日本語母語話者にはよく使われる反面、文法的に誤りであるとする見方があるためか、実際に導入している教材は少ない。そこで本研究では、日本語学習者がこれらソウダの否定表現をどの程度理解しているのかを探るため、アンケート調査を行った。その結果、学習者のレベルを問わず、全体的にVナ（サ）ソウダの理解度が高く、教授内容と学習者の知識とに隔たりがあることがわかった。

## 22. 大学体験を目的とした短期留学プログラム—アンケート結果から見えてきた改善の成果と今後の課題—

金蘭美・半沢千絵美（横浜国立大学）

本発表では、2018年7月に実施した「YNUサマープログラム」について報告する。本プログラムでは、大学体験を主な目的として、5つの国と地域から2週間にわたって25名の学生を受け入れた。本プログラムの特徴は、サマープログラムのための日本語クラスの開講はせずに、すでに開講されている日本語やその他の授業に参加させたり、さらに参加者の大学院進学を見据えた大学紹介を開催するなど大学の魅力を知ってもらうという大学体験を主軸に置いたことである。本発表では、今年度のプログラム実施に当たり、前年度のアンケート結果をもとにどのように改善を試みたか、また、今年度のプログラム実施で見えてきた新たな課題について述べる。

## 23. 日本語教育の授業環境に関するユニバーサルデザインの検討

横山りえこ（名古屋経済大学）

近年、日本においても授業のユニバーサルデザインが検討されるようになり、日本語教育の分野ではそれを「個性を考慮し、すべての学習者にとって学びやすい環境や指導への工夫」として考えることができる。しかし、これまで日本語学習者にとってどのような環境が学びやすいのか調査した報告は管見の限り見当たらない。そこで本稿では、授業で使用するpptの背景色、ハンドアウト類のフォント、行間、そして授業を行う室内環境などをまとめて「学習環境」とし、12か国の日本語学習者56名と日本語教育に携わる日本人39名の併せて95名にアンケート調査を行った。国籍問わず学びやすい学習環境がどのようなものかまとめて検討する。

### 【ポスターセッション2】

#### ●口頭発表（2件）

## 24. 日本語多読活動開始に対する支援事例

高橋亘（神田外語大学）

近年、日本語多読を実施する学習者を対象とした研究は急速に進められているが、同時に活動を運営する支援者を対象とした研究も行っていく必要がある。本発表では、日本語多読活動を開始するための支援に注目し、大学院生や教員を対象に実施したセミナーを事例として報告する。また、質問紙調査結果から、セミナー参加者が日本語多読に対してどのような意識を持っているのか、そして支援者が考える運営上の今後の課題について明らかにし、支援者に対する支援のあり方について考察する。

## 25. 高等教育機関における留学生のためのビジネス日本語教育の再考—大学教育の観点からのアプローチ—

鹿目葉子・大橋真由美（東京国際大学）

「ビジネス日本語教育」は、2007年、留学生に対しアジア人財資金構想において導入され、2008年、文部科学省による「留学生30万人計画」の出口として留学生の日本企業への雇用促進の期待から、そのニーズが高まりをみせた。筆者らが高等教育機関におけるビジネス日本語の授業や教材を概観したところ、入社後に実施される新人研修の内容に相当するものや、ビジネスで使用される語彙等に焦点をあてたものが多くみられた。これらは、高等教育機関における「ビジネス日本語教育」として的確な内容なのだろうか。

そこで、前述を問題提起とし、大学教育の観点から「ビジネス日本語教育」を再考し、授業内容と教材について提案をする。

#### ●ポスター発表（上記2件を含む22件）

## 26. 全学部留学生共通シラバスに基づくシャドーイング授業の検証—より効果的な授業を目指して—

岩井智重・石山友之・山下由美子・神村初美（東京福祉大学）

日本で就職する外国人学習者にとって発音は円滑なコミュニケーションの担保には欠かせない。そこで、発音教育として行った全学部 3・4 年次留学生対象のシャドーイング授業を、選択式および記述式の質問紙調査によって検証した。授業期間は 1 年間、調査対象は 5 クラス・95 名で、中国人 73%・ベトナム人 20%である。分析には R と KH Coder を用いた。その結果、特に「Q5.発音の間違いに気づく」、「Q7.発音が良くなった」の平均値において、経験者群は未経験者群よりも有意に高く、シャドーイングの効果を実感していることが示唆された。また、共起ネットワークからは自身の発音の意識化が確認され、アルバイトや敬語の習得に功を奏すといった波及効果が窺われた。

## 27. ピア・ラーニング活動の改善とその効果—学習者のコメントから—

渡辺民江・上田美紀（中部大学）

上級日本語読解の授業で、ピア・ラーニングを取り入れた読解文要約を行ってきた。実践後には学習者対象の内省と評価のアンケート調査を行い、具体的な評価および否定的コメントを分析した。それにより、課題として、時間効率・好み・グループワークの問題点・レベル差が挙げられた。本研究では、母語使用を防ぐ・時間を細かく区切る・プロセスからの学びの意義を提示する等、改善点を取り入れた実践を行った。アンケート調査の結果から、学習者がグループワークの意義を理解し、ポジティブに捉えており、時間効率や学習形態に対する個人の好みを問題視していないことがわかった。このことから、改善に一定の効果があつたと考えられる。

## 28. 「流暢さ」の向上を目指す教室活動の実践報告—質問リストを用いたペアワーク—

井脇千枝（福岡大学留学生別科）

コミュニケーション能力の向上を目指して行っているつもりでの教室活動が、「正確さ」を主眼としたものに偏っているのではないかと。発表者自身の授業の振り返りをきっかけに、「流暢さ」の向上を主眼とした活動を授業に取り入れた。自分自身について語るペアワークは、学習者の個性や創造性が生きる活動であり、母語が同じ学習者間においても積極的な取り組みが観察された。また、質問リストを用いることで、活発なインタラクションを促し、学習者が活動に集中しやすい環境をつくることができた。今回の発表では、この質問リストを用いたペアワークの実践について報告する。

## 29. 日本語運用能力を測るプレイスメントテスト開発の試み—文法項目からの考察—

大谷つかさ・白鳥文子・篠原みゆき（京都外国語大学留学生別科）

当機関ではプレイスメントテストにおける筆記試験の改訂を行っている。改訂では、①従来より詳細なレベル判定が行えること、②従来の JLPT に類似した選択式より運用能力がより測れる問題形式とは何かを探ることの 2 点を重点目標とした。文法項目における②の試みとして、実際の使用場面を想定した会話形式及び記述式の問題を加え、知識だけでなくそれを理解し適切に回答できるかも見た。更に、会話形式の問題は一部あるいはすべてを音声にした問いも実施し、レベル判定が難しい初中級から中級までの学習者を対象に、問題形式による違いについて調査した。発表ではその結果報告を行い、運用能力を測る文法試験の可能性について述べる。

## 30. 日本語教員が「教える」以外に抱える仕事—日本語教員の管理運営業務に関する調査—

平山允子（日本学生支援機構）・中川健司（横浜国立大学）・浦由実（アン・ランゲージ・スクール）

日本語教員は、所属機関で、授業実践以外にも、学生対応や時間割作成等の様々な管理運営業務を担っている。授業実践や研究調査とは異なり、管理運営業務について学会・研究会等で機関を越えた情報共有や議論がなされることはほとんどなく、何か課題があつてもそれぞれの職場で試行錯誤を繰り返すのみで、他機関の事例から業務改善のヒントを得ることが難しい。本研究では、日本語教員がどのような管理運営業務を担い、それらの業務についてどのような負担を感じ、どのようなリソースを有用と考えているのか、といった点を探るためにアンケート調査を行った。その結果、日本語教員が担う管理運営業務の幅広さや負担度等が改めて確かめられた。

## 31. 日中の「面子」という語義の異同に関する調査—実際の使用場面から—

ザン カリン（拓殖大学大学院生）

日中両国ともに「面子」という言葉があり、これまで日中における「面子」の比較について数多くの研究が行われてきた。その多くは文化的側面からの調査によって、日中では「面子」に関して文化の差があると結論づけ

ているが、疑問が残るものもある。日本語の「面子」の意味や使われ方は必ずしも中国語と同じではない。しかし、いずれの研究においても、「面子」が厳密に定義されていないため、調査対象者は自分の母語の「面子」の定義に従って回答した可能性が考えられ、言語の意味のずれが文化の差として捉えられている可能性がある。そこで、本稿では言語面に焦点をあて、アンケート調査により、日中の「面子」という語義の異同を実際の使用場面から明らかにする。

### 32.文化を批判的に教える—日本語教育副専攻課程における実践から—

瀬尾匡輝（茨城大学）

発表者は、日本語教育副専攻課程の学生が、本質主義的文化観の立場から日本文化を留学生に紹介する姿をよく目にしていた。だが、それはステレオタイプや自文化中心主義を助長してしまう恐れがある。そこで、久保田（2008;2015）が提唱する文化を批判的に教えるための 4D アプローチ（descriptive, diversity, dynamic, discursive）を踏まえ、日本語教授法を履修する学生が、アメリカで日本語を学ぶ初級学習者に対してオンラインで日本文化を教える実践を行った。発表では、学生が書いたりフレクシオンとインタビューをもとに本実践をふりかえり、本質主義的文化観を乗り越えた文化紹介の可能性を考える。

### 33.スマートフォン辞書アプリについての一考察

寺嶋弘道・板井芳江（立命館アジア太平洋大学）

近年、スマートフォンが急速に普及し、日本語学習者用の辞書アプリの開発が著しく進んでいる。こうした背景からスマートフォンの辞書アプリを選択する学習者が増加しているが、辞書アプリで検索した場合、どのような結果が表示され、どのような問題が生じるか、学習者や教員に十分に理解されていないという現状がある。本研究では、初級・中級の学習者によく使用される「Google Translate」、中上級・上級の学習者によく使用される「imiwa?」を用いて日本語を検索した場合、どの程度、的確な検索ができるかを調査し、検索時に起きる問題を考察した。また、「imiwa?」に関しては表示される例文の実態とその問題点を考察した。

### 34.相手言語接触場面における学習者の談話管理能力—来日直後と1年後の比較—

本田明子（立命館アジア太平洋大学）

本研究では、接触場面における学習者の談話管理能力の変化を探るために、6名の学習者の来日直後の自然談話と一年後のものとを比較した。分析の結果、来日直後の談話では、母語話者が質問を投げかけ「会話を進行する」役割を果たし、学習者は最小限の情報提供に終始する割合が高かった。また、学習者が聞き手の役割になる場合も決まった形の短いあいづちを打つにとどまっていた。それに対し、1年後の会話では、学習者も「会話を進行する」役割を担うようになっており、定型的なあいづちにとどまらず、相手の情報提供にさらに情報の追加を求める複層的な談話進行をおこなうなど、談話管理能力に変化がみられることがわかった。

### 35.非漢字圏中上級学習者は読解中の辞書使用・不使用の判断をどのように行っているか—辞書引き行動の観察及びインタビューの結果から—

八木真生（東京外国語大学）・川村よし子（東京国際大学）

学習者は、中級から上級に進むにつれ、未知語が含まれた文章を、辞書を使って読む機会が増える。その際、どの語を辞書で調べるべきか適切に判断し、効率的に読解を進めることが求められる。ところが、これまでの読解研究では辞書使用に焦点を当てた研究は少ない。そこで、本研究では、読解中の辞書引き行動を観察するとともにインタビューも行い、辞書使用・不使用の判断をどのように行っているかを明らかにしたいと考えた。調査の結果、未知の語でも調べない場合も多く、辞書使用の判断は学習者によって大きく異なっていた。また、学習方法、テーマへの興味の有無、速読重視の習慣等、複数の要因が影響している可能性があることがわかった。

### 36.LINE と口頭会話における終助詞「ね」の使用の特徴—台湾人中級日本語学習者を対象に—

小山内早織（東北大学大学院生）・菅谷奈津恵（東北大学）

本研究では、台湾人留学生1名を対象に、LINE 会話と口頭会話における終助詞「ね」の使用頻度と機能について分析した。調査は約半年間にわたり、1週間に1回のLINE 会話を行うとともに、LINE 会話6回毎に口頭会話を実施した。分析の結果、「ね」の使用頻度は口頭会話よりもLINE 会話のほうが高かった。使用頻度、機



能ともに LINE 会話、口頭会話の双方で半年間に大きな変化はなかった。また、どちらの会話でも「そうですね」など決まったパターンの終助詞の使用が多く観察された。調査対象者が使用した終助詞「ね」の多くは、チャックとして用いられていたと考えられる。

### 37.地域の日本語教室における講師間の関係構築を目指した試み—秋田市日本語教室を事例に—

荒井美帆（国際教養大学大学院生）

本発表では秋田市が運営する日本語教室において、在籍する講師間の関係構築を目指した勉強会の実践報告を行う。この教室ではチームティーチングを採用しているが、同じクラスを担当する講師同士でコミュニケーションを図る機会がほぼなかった。そこで、秋田市と連携し、講師同士がコミュニケーションを図れる場として共同で教案を作成する勉強会を開催した。勉強会終了後のアンケートやインタビューの結果から、参加者の満足度は高いものであったが、グループワークの妥当性については課題が残った。本発表では、勉強会を通して講師同士の関係構築だけでなく、指導力強化を図れるような意義あるものにするためにはどうすべきかについて論じたい。

### 38.雑談のポイントとしての「リアクション」

才田いずみ（東北大学大学院）・稲飯亜有美（東北大学学部生）

日本語学習者にとって、日本語母語話者との雑談は、日本語の能力を高めつながりを作っていく大きな機会であり、ここに会話教育の必要性があると考えられる。これまでに収集した接触場面雑談のデータから、学習者発話には相手の発話に対する評価が少ないこと、相手が導入・展開しようとした話題を流してしまう場面が見られることがわかった。本発表では、これらの雑談データを示しつつ、会話を円滑に進めていくための練習教材の基本デザインのアイデアを提示する。

### 39.理工系留学生の日本語による物理問題解答の分析—高専入学予備教育生を対象に—

濱野哲子・佐藤曜子・笠原（竹田）ゆう子（電気通信大学）

学部理工系科目の学習で求められる日本語は、日本で使用される高校教科書の表現や形式である。留学生が作成した物理の問題解答をみると、入学前予備教育時に日本の教科書を使用しているどうかにかかわらず、形式や表現が専門として適切なものになっていないことが多い。学部留学生対象の基礎専門教育でそれらの指導を行うためには、彼らの解答の問題点を明確に把握する必要がある。そこで、本研究では、日本の高校物理の教科書を用いて学習した留学生が行った記述式の答案の内容を分析した。具体的には、解答が 1)問題に対応した必要な形式を備えているか、2)物理として解答が正しいか、3)専門として適切な表現であるかを検証した。

### 40.動画への「テロップ付与活動」を取り入れた授業実践—中上級日本語学習者を対象とした活動の分析—

谷口南（名古屋大学大学院生）

中上級レベルの学部交換留学生を対象とした「日本語総合」科目において、筆者が準備した動画に学習者が必要であると思った情報を自由に付けていく「テロップ付与活動」を行った。この活動は、字幕を付与した経験がある日本語学習者へのインタビューから付与過程を抽出した「テロップ付与活動モデル」に基づいている。テロップ付与過程では、視聴の繰り返しによる発話の聞き取りや内容を把握するための相互行為が見られ、モデルと同様の過程が確認できた。この活動によって、学習者自身が必要であると思う情報を選択し自身で表現・発信する力が育成されることが示唆された。

### 41.専門科目への接続を目指す日本語教育の試み—中学校教科書『公民』を用いた授業の実践—

岡村佳代・阿久澤弘陽・棚橋明美・松村憲（聖学院大学）

本発表では、聖学院大学の日本語科目として開講されている「アカデミックジャパニーズ」及び留学生用一般教養科目「政治経済」について取り上げる。この科目は、日本人学生にとっては中学・高校時代に既習となる日本社会についての基本的な知識を持たない留学生のために、専門科目へのスムーズな接続を目指して 2018 年度から新規に開講された。本発表では当該科目の実践方法の紹介と授業アンケート結果の分析を行う。とりわけ、学生自身の授業への意識から専門科目への適切な接続を行うための課題を検討し、専門科目へのつながりを意識した日本語教育の実践における課題とその方向性について論じる。

#### 42.日本語とアゼルバイジャン語で「断り方」の対照研究

アイダイエワ ザリファ (横浜国立大学大学院研究生)

アゼルバイジャン人日本語学習者が日本語でのコミュニケーションに不安を感じる。待遇表現を日本語教育に導入することでこの不安を軽減できるのではないかと思う。しかし、待遇表現は範囲が広い項目であるため、その中で学習者が最も不安を感じる「断り」を取り出し、アゼルバイジャン語と日本語を対比しながら明確にしたいと思う。断り場面だとアゼルバイジャン人は日本人と比べて直接であることをいえる。そして、断りの後に長く述べられている理由説明が日本人からすると言い訳に聞こえる可能性もある。場面や相手ごとに適切な日本語を使いこなせるためにこういうニュアンスを明らかにしていきたい。

#### 43.内容理解を深めることを目指した中上級レベルの対話的聴解授業の試み

田中典子・近藤行人 (名古屋学院大学)

アカデミックスキル向上を目指す教材は専門的な知識や概念を含んでおり、内容を学ぶ中で言語知識や思考力を含めた総合的な日本語能力育成が求められる。そこで、本実践では講義・研究発表を扱った聴解教材を用い、理解を深める仕掛けと対話を組み込むことにした。授業ではまず正誤問題での理解チェック後、内容理解質問を用いた対話活動を行った。その後、応用的な理解を促すような内容の聴解教材を作成し、専門的な概念を別の文脈や場面で応用するような対話活動を試みた。内容を段階的にインプットし、それぞれに関する対話活動を組み込むことで、表面的な理解ではなく、異なる文脈にも応用できるような理解を得たと考えられる。本発表では、学習者の理解の変遷を紹介し、内容理解を深める実践の重要性について提案する。

#### 44.非漢字圏日本語学習者の漢字学習初期段階における習慣形成と漢字構成要素の理解に基づいた漢字指導法

林田なぎ (東京文教学院)

非漢字圏日本語学習者が漢字学習を進めるにあたり直面する問題は多い。語彙が増え、一つの漢字に対する読み方や画数が増えていくに従い、学習者の漢字学習の負担も増加する。非漢字圏学習者の中級以降に提出される漢字に対する適応力を高めるため、初級の段階で漢字に対する理解基盤を強固なものとする方法として、入門、初級段階で提出される漢字の構成要素となる部首、カタカナやひらがなの基となるパーツ、漢字に着目し、漢字構成要素の意味理解を即時に喚起する練習と併せた書き順の徹底指導を行い、漢字そのものの意味理解と漢字記述に対する習慣形成を目指した。本稿ではその経過と実践方法を述べる。

#### 45.専門分野の学びを視野に入れた日本語教材作成の試案—あん摩マッサージ指圧師国家試験「生理学」分野の過去問題を再構成した自習用教材の作成—

河住有希子 (日本工業大学)・浅野有里 (日本国際教育支援協会)・北川幸子 (神田外語大学)・藤田恵 (立教大学)

本研究ではあん摩マッサージ指圧師国家試験合格を目指す日本語学習者に向けた自習用教材作成の試案を述べる。試験問題は専門用語の意味および、その用語が示す事象の説明を問うものが多いため、設問文と正答選択肢だけを示して提示順を整理すれば、用語集のようなものが作成できる。これに日本語能力試験の出題範囲を目安とした語彙や文型の解説を加えることで、専門知識を持たない日本語教師でも、専門分野の学びを視野に入れた自習用の素材を作成することができる。学習者の専門分野への理解が不十分だと思われる場合には、学習者が専門教員に質問するための日本語面での支援をすることで、専門教員と日本語教員の連携が可能となるであろう。

#### 【ポスターセッション3】

●口頭発表 (2件) \*ポスターセッション2の口頭発表2件と同じく午後1:00-1:50の時間帯に行います。

#### 46.ブレンストーミング型の話し合いにおける「書く」という行為の問題点

工藤嘉名子・大津友美・熊田道子 (東京外国語大学)

ブレンストーミング型の話し合いでは、話し合いの内容を可視化・共有する目的で、出てきたアイデアを紙に書きながら話し合うことが多いが、「書く」という行為が生産的な話し合いに結びつかない場合もある。本研究では、話し合いの成果発表において内容的に不十分であると判定したグループの話し合いについて、「書く」という行為に着目し、話し合いの際のやりとりを分析した。その結果、①「何を」よりも「どう」書くかに注意が向いている、②書きやすい言葉を採用する、③発想を広げるキーワードとなり得る発話を見逃してしまう、と

いった問題行動が明らかになった。これらの分析結果に基づき、授業改善のための具体的方策について論じる。

#### 47.反転授業の導入による対面授業の変化

手塚 まゆ子（関西大学留学生別科）

本研究は、日本語上級クラスの文法科目において反転授業を導入した場合、どのような授業構成となるか、導入前の授業と比較し、考察したものである。文法の授業では、従来文型導入から始め、練習問題へと進む。導入は文型理解のために、教師主体で学習者とのインタラクションによって行われるが、その時間は意味の理解だけにとどまる。その導入を授業外の自宅学習にすることによって、授業内の時間を練習やフィードバックの時間に充てることができた。到達度テスト比較や学習者インタビューでは、その反転授業の効果が確認できたが（古川・手塚 2016）、対面授業における活動には改善の余地がある。その点について、授業構成に注目し、比較しながら考察していく。

#### ●ポスター発表（上記2件を含む22件）

#### 48.習得した日本語のアウトプット「川柳」—日本文学非専攻の学部留学生を対象に—

山崎智子（東京福祉大学・大学院）

本発表では、日本文学に視点を置き日本文化の一端を考察する授業「日本文化研究」での実践を報告する。日本文学非専攻の学部留学生を対象とした授業で、日本語運用能力を最大限活かし、少ない文字数の中に、自分の考えや疑問を投げかけることができるようにすることを学習目標とした。そのために、川柳に関する文献を読み、コンクールの受賞作品を分析していった。川柳を作る方法を文献から習得する力、社会の動きや時代背景に沿って作品を分析する力を養うとともに、学生個人が蓄積した表現力や個性がどのように作品に表れたか見ていく。

#### 49.日本語母語話者・学習者を対象とした意見陳述コーパスの開発

伊東克洋（東京外国語大学）・半沢千絵美（横浜国立大学）・畑佐由紀子（広島大学）・横山千聖（広島大学大学院生）

近年、日本語教育界では様々な話し言葉のコーパスが構築され、公開されてきている。しかし、そのほとんどは対話が中心であり、独話による意見陳述等を含むコーパスはあまり見られない。本研究では現在構築中の独話意見陳述を中心としたコーパスについて報告したい。発話データは大学、大学院またはそれに準ずる機関に在籍する日本語母語話者と韓国語、中国語、英語を母語とする中上級日本語学習者で、主に意見陳述における発話データを横断的に収集した。発表ではデータの概要、コーパスの概要案および実際に意見陳述データを利用した研究実践例についても報告したい。

#### 50.多様な言語文化背景を持つ年少者学習者の日本語力向上の経過—学習者の日本語力のレベル差を活かした授業の長期的実践から—

河野あかね・和田美砂子・白田千晶（つくばインターナショナルスクール）

年少者を対象とする日本語授業では、学年や年齢を優先してクラス編成を行うことが多く、クラス内に多様な言語文化背景の学習者が混在し、また学習者間に日本語力のレベル差が生じる。そこで当校では、クラス内における学習者の多様な言語文化背景および日本語力のレベル差を肯定的に捉え、かつ各学習者の日本語力の向上を目指す授業に取り組んできた。本発表では、そのような授業実践を通して観察された年少者学習者の日本語力向上の経過と、学習者の言語文化背景や発達年齢による傾向について報告する。

#### 51.地域の偉人と「プロジェクトワーク」—清水でさくらももこを探す—

斉木ゆかり（東海大学）

学習者が住む地域をコンテンツにした学習、静岡市に校舎があるという特徴を生かした授業はできないかと考えた。「世界と日本」という授業で学部留学生を対象に、2017年には清水次郎長を、2018年にはさくらももこをテーマにプロジェクトワークを行った。2018年のプロジェクトは、導入として自分が尊敬する人の説明、漫画を見ないでまる子の似顔絵描き、まる子の性格、『ちびまる子ちゃん』が有名になった要因についての意見、さくらももこの詩を鑑賞後好きな詩を母語に翻訳、漫画の登場人物になって朗読劇、フィールドトリップ計画と

実施、フィールドノートの作成、発表、偉人について調査する事の意義についての意見発表となった。本発表ではプロジェクトワークの意義と一案を提示する。

## 52.感動させる「修了生プレゼンテーション大会」一話す人も聞く人も「良かった」と思えるような場の共創実践―

萩原幸司（名城大学）

本発表では、名城大学に於ける交換留学生日本語コースの実践として、各学期の授業の最終週に2授業合同の形で実施している「修了生プレゼンテーション大会」（以下「プレゼン会」）の取り組みを報告する。「プレゼン会」自体は同コースで長年伝統的に行われていた「行事」であるが、今年度赴任した報告者はこれまでの慣習を検討し直すと共に、今年度後期から交換留学生として受け入れを開始した日本語未修者を「プレゼン会」に加えることも意図して、それまで自由であった発表内容に統一テーマを与えたり、修了生と在校生双方に意識を変えるような指導をしたりといった改革を施した。その効果の検証も併せて議論したい。

## 53.日本語の会話における間接受身文の使用実態―使いたくなる導入を目指して―

笹川史絵（大阪大学大学院生）

「私は隣人にピアノを弾かれた」とような間接受身文は、文型導入の際に文脈的な情報から切り離されているため、使用場面が不明確で産出につなげにくいという問題がある。そこで、間接受身文の使用目的を明らかにするために、会話の種類、共起表現といった文脈的情報を考察した。結果、「自分の経験」を語る間接受身文は、基本的に受身文主語が事態を「コントロール不可能である」ことを表現し、マイナスの心理表現が共起すると【愚痴】として使用され、補助動詞「てしまう」や笑いが共起すると【笑い話】として提示される。前者は会話の参加者との共感、後者は笑いを生み出すことで人間関係を維持するために使用されることが示唆された。

## 54.インタビュー活動を主とした若者ことば指導の実践報告と実践方法に関する提案

辻本桜子（立命館大学）

本研究は、方言、性差、若者ことばなど日本語のバリエーションのうち、若者ことばのみに焦点をあてた授業の実践報告と、実践方法に関する提案を行うものである。実践は大学の正規留学生の日本語授業の中で行ったものであり、学習者は主に日本人大学生への個別、グループの2回のインタビュー活動を通して若者ことばの収集を行い、結果を各自ハンドブックにまとめた。本研究では、一連の若者ことば指導の実践報告を行った後、学習者のアンケート調査の結果から、若者ことば指導のより良い実践方法について提案を行う。

## 55.交換留学生の日本語学習と将来とを繋ぐ教室活動の報告

村上智子（神田外語大学）

出身校である程度日本語を習得してから来日する交換留学生の中には、将来日本と関係する仕事をしたいという希望を持つ学生が少なくないが、日本語を使ってどのように社会に関わるのかまでは具体的にイメージできていないことも多い。そこで、本学の交換留学生を対象に開講されている課題主導のコースにて「仕事・キャリアについて考えよう」というトピックを学習項目として取り上げ、自身の将来の仕事やキャリアについて考えを深めることを目標とした一連の活動を行った。本稿では、授業の録音データやアンケート調査から見た学習者の学びや学習者が自身の将来と目標をどのように具体化したのかを報告し、本活動の意義と課題について述べる。

## 56.ビジネス日本語クラスにおける「質問づくり」を活用した自律学習の試み

深田絵里（愛媛大学）

ビジネス日本語教育では、日本語の知識の獲得にとどまらず、状況に応じた「コミュニケーション能力」、多様な場面に対応できる「問題解決能力」の向上が求められている。そこで筆者が担当する日本語上級クラスでは、対話と協働に基づく自律学習を促すため「質問づくり」の活動を取り入れた。学習者が他者との対話によって、ビジネスシーンや社会生活の中で一般的な問題から自分自身の課題を見つけ、理解を深めていくことを目的としている。本発表では、学習者自身が課題を設定し発表を行うまでの経緯と活動の成果について報告する。

## 57.大学図書館内の一室を利用した多読の実践報告

佐々木良造（秋田大学）

多読授業を行うにあたって、多読の環境整備は重要な作業であるものの、授業実施以外に、多読のための図書の選定、購入、管理、貸し出しといった業務を、多読担当の教員だけで十分行うにはできない。そこで発表者は、自身の所属する大学の図書館（以下、大学図書館）の協力を得ながら多読授業を行う「図書館多読」（酒井・西澤 2014）の実践を試みた。本発表では大学図書館内の 30 名ほど収容可能な一室を利用した多読を行うにあたって、準備段階における大学図書館職員との検討事項、大学図書館を利用するメリットとデメリット、前学期と比較した受講生の選書の傾向、受講生による「図書館多読」の評価について述べる。

## 58.ニュース報道文の特徴を生かした精聴授業の実践

河野多佳子（アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター）

聴解教材としてテレビ等のニュースが使用されることが多い。筆者が担当した精聴クラスでは、グループ学習という環境を生かしながら、ニュース番組を教材としてディクテーションを行った。これまで未習語彙の聞き取りの難しさが問題となっていたが、ニュースのリード部で導入した語彙から推測し、それをクラスで共有しながら、学習者全員で 1 つのスクリプトを作ることを目指す聴解指導を行った。また報道文の特徴を明らかにすることで、普段耳にする日常会話とは違う話し言葉を聞き取る助けとなるよう、あらかじめ学習者の負担を軽減しておくことに留意した。本発表ではこれらの実践と、学習者の反応について報告する。

## 59.学習者 R さんはなぜそんなにがんばれるのか

石橋 美香・大河内 瞳（立命館大学）

日本で学生生活を送る留学生の授業に取り組む姿勢や熱意はそれぞれ異なる。その中で非常に積極的かつ熱心な学習者は、何が動機づけとなり、その動機を維持し得るのだろうか。そこで、日本語の授業に積極的に参加していた 1 名の学習者へインタビューを実施した。その結果、自身の日本語力向上のためおよび日本人学生との関係作りのため様々な努力をしていることが分かった。動機づけには自身の年齢や母国への失望感などが関わっていることが明らかとなった。こうした学習者の思いを理解することは今後学習者を支援する際の一助となりうると思われる。

## 60.アクセント核のない発話において感情はどのように表出されるかー日本語学習者が日本語音声から感情を聴取することの難しさを考えるー

中林律子（東京福祉大学）

本発表では「〇〇さんも来ますよ」といった発話に対する問い返し疑問文「〇〇さんも？」のうち、アクセント核による基本周波数の下降がない発話（例：山根さんも？）を対象とし、感情が込められた場合の音響的特徴を分析する。問い返し疑問文は相手の発話（またはその一部）を繰り返す表現であり、言語情報以外の情報から相手の感情等を聴取する必要がある。アクセント核による基本周波数の下降がない発話は、下降のある発話に比べ感情を聴取するための音響的手がかりが少なく、日本語学習者にとって感情の聴取が困難であると予想される。これまでに得られた知見も踏まえ、今後日本語教育においてどのような研究や教育が必要か考えたい。

## 61.日本での就職をめざす日本語初級レベル非漢字圏理系院生対象クラスにおける日本語産出活動の取り組み

田代桜子・築地伸美（愛媛大学）

本発表は、日本での就職を志す日本語初級レベルの非漢字圏理系院生を対象としたクラスの実践報告である。英語での研究活動を前提に来日した理系院生も一定数は日本での就職を希望している。しかし、特に地方での就職の場合、職場では日本語によるコミュニケーションも求められる。そこでクラスの基本目標として、自分の PC で日本語入力を行い教員へメールを送る、既習文法等を用いた自己表現活動をするなど、初級レベルでも可能な日本語産出能力の育成を目指した。その結果、就職相談員のヒアリングによって、本クラス受講生は日本語産出への抵抗が減り、就職活動にも意欲的になったことが窺えた。

## 62.日本語における「笑い」に関するオノマトペの音韻形態的考察ーCVCV タイプ派生形を対象にしてー

夏逸慧（東北大学大学院生）

本研究は日本語学習者に笑いに関するオノマトペの派生形をよりよく理解させるために、BCCWJ から取り上げた「笑い」に関する二音節の語基（18 語）を研究の対象とし、次の課題を設定した。①「笑い」に関するオノマトペ派生形の形態的な特徴を考察し、「CVQCVri」型と「CVNVCVri」型の音韻規則を検証し、オノマトペの創造力を明らかにする。②音声の大きさの変化（大-小・小-大）や形の変化（最初の形-終わりの形）から、「オノマトペ標識」の音象徴性も含めて検討する。その結果、「笑い」に関する日本語の CVCV タイプ派生形は「オノマトペ標識」の音韻規則を適用しても、実際の発話中で特殊な用法が見られ、促音は音節の位置によって微細な印象の違いを捉えることを主張する。

### 63.日本語学習者の音声へのよりそい方を考える地域日本語ボランティア講座の試み

高橋志野（愛媛大学）

本発表は、ある地域日本語ボランティア養成講座で初めて開催した音声に関する講座の実践報告である。講座では、いわゆる「音声学の教育」ではなく、日本語学習者の発音の事例を提示することや日本語学習者の発音に対するボランティアの許容度を高めることを目的とした。講座の録画ビデオ観察やアンケートの結果、日本語ボランティアの音声への苦手感を多少なりとも軽減できたことがうかがえた。しかし、日本語ボランティアの中には「音声」と「表記」の違い等音声の専門家が考える初歩レベル以前の部分で混乱している者や、専門家からは学習者の具体的な発音の問題をすぐ修正できる方法を教えてもらえると期待する者がいることも明らかとなった。

### 64.介護のオノマトペ学習アプリ「おのまとこ」の開発と試行—痛みのオノマトペを中心に—

神村初美（東京福祉大学）・鈴木元（アカデミアシステムズ株式会社）

2019年4月改正入国管理法の施行に伴い、介護は14業種のうち最大の受け入れ枠、5年間で6万人の見通しとなり、外国人介護従事者の増加は自明の理である。一方、日常生活や介護現場での円滑なコミュニケーションに不可欠なオノマトペを学習する機会も手段も乏しいのが日本語教育の現状である。そこで、介護のオノマトペを手軽に自学自習する一助となることを目指し、AIを用いた Chat Bot によりロールプレイ形式の対話練習を可能とした既存日本語学習アプリプラットフォームを基にし、スマートフォン用のオノマトペ学習アプリ「おのまとこ」を開発した。インドネシア人 EPA 介護士への試行の結果から、学習者の作例を促す機能の付加が課題と示された。

### 65.「初級日本語教科書共通語彙リスト」の開発

本田ゆかり（東京外国語大学）

本研究は、最近、改訂および開発された初級日本語教科書4種（『みんなの日本語』『げんき』『できる日本語』『大学生の日本語初級ともだち』）を対象に共通語彙調査を行い、過去に行われた語彙調査の結果や、『日本語能力試験出題基準』の語彙と比較したものである。先行研究において、日本語教科書の語彙の一致率は高いことが知られている。本研究により、現在、「初級修了」程度の学習者がどのような語彙を共通して知っているかを把握できるほか、近年、教材作成者が重要と考えている語彙の傾向を知ることができる。この共通語彙リストは無償公開し、今後も調査対象の教科書数を増やしていく予定である。

### 66.聴解ストラテジーの育成を意図した授業の効果—再話と聴解ダイアリーの分析結果から—

藤田裕子（桜美林大学）

日本語中級レベルの学習者対象の聴解授業において〈情報を選別する〉〈予測する〉〈推測する〉〈モニターする〉〈質問する〉〈反応する〉という聴解ストラテジーを指導し、授業活動として再話を取り入れ、授業内外での聴解学習について学習者に聴解ダイアリーの記入を求めた。分析の結果、学期終了時には導入したストラテジーを使用するという回答が増加した。特に予測や推測、質問のストラテジーに増加が見られたが、聴解ダイアリーの記述からこれらの重要性を認識した者が多いことがわかった。一方、再話は聴解力の向上に役立ったとする声が多く、再生率も学期終了時には高まった。さらに、聴解学習を肯定的に捉える者も増えた。

### 67.日本語学習者が狂言を楽しむための情報提示のあり方—あらすじの英訳を例に—

植松容子・山本晶子（昭和女子大学）御手洗碧・松村咲歩（昭和女子大学学部生）

日本の伝統芸能の中で能や歌舞伎は留学生にもよく知られているが、狂言の認知度は低い。そこで、昭和女子

大学日本文化発信プロジェクトでは、留学生に狂言の魅力を伝える活動を行っている。今年度は「狂言の台詞を楽しむ」ことを目的に「附子」のあらすじを日本語及び英語で記した上で、台詞の一部を示す冊子を作成した。その冊子をもとに非漢字圏の日本語学習者を対象に調査した結果、英訳があることで理解が促進されることが示唆された。一方、鑑賞前にあらすじを読みたくないという声や、キーワード（例：附子）を理解していなかったために誤解が生じるケースも見られた。あらすじの英訳に加えて、内容の予測を促すための工夫が必要であろう。

## 【会場案内】

### 杏林大学 井の頭キャンパス

大学 HP : <http://www.kyorin-u.ac.jp/>

アクセス : <http://www.kyorin-u.ac.jp/univ/access/mitaka.html#access2>

杏林大学・井の頭キャンパス  
〒181-8612  
東京都三鷹市下連雀 5-4-1



#### 〔交通について〕

東京駅・新宿駅から JR 中央線快速で「三鷹駅」までお越しください。「三鷹駅」南口 8 番乗り場より、「杏林大学井の頭キャンパス行き」(小田急バス)にご乗車いただくのが便利です。所要時間は 15 分ほどで、会場 (F 棟) に隣接する学内バスロータリーにて下車することができます。その他の駅からのアクセスについては、ホームページをご確認ください (<http://www.kyorin-u.ac.jp/univ/access/mitaka.html#access2>)。

#### 三鷹駅からのバス時刻表



鷹 63 杏林大学井の頭キャンパスゆき  
三鷹駅 9 時 5 分, 9 時 24 分は 10 時開会  
に間に合います。  
※3 月 23 日は通常ダイヤではなく、杏  
林大学休校ダイヤで運行しています。



※小田急バスは「前乗り」「前払い」(現金 : 220 円、交通系 IC カード : 216 円) です。

#### 羽田空港より

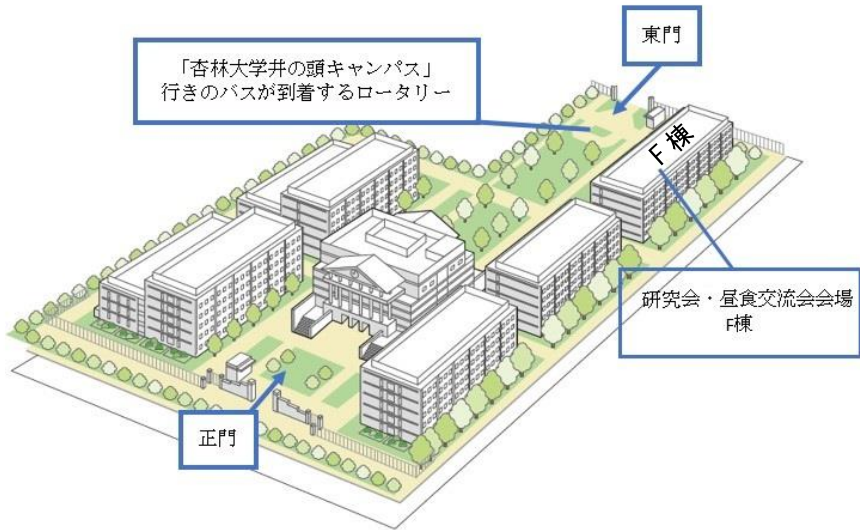
羽田空港 (東京国際空港) → 東京モノレール (羽田空港第 1 ビル駅 or 第 2 ビル駅～浜松町駅) または京浜急行 (羽田空港駅～品川駅) → JR 山手線または京浜東北線 (浜松町駅 or 品川駅～東京駅) → JR 中央線 (東京駅～三鷹駅)

#### JR 東京駅 (新幹線利用) より

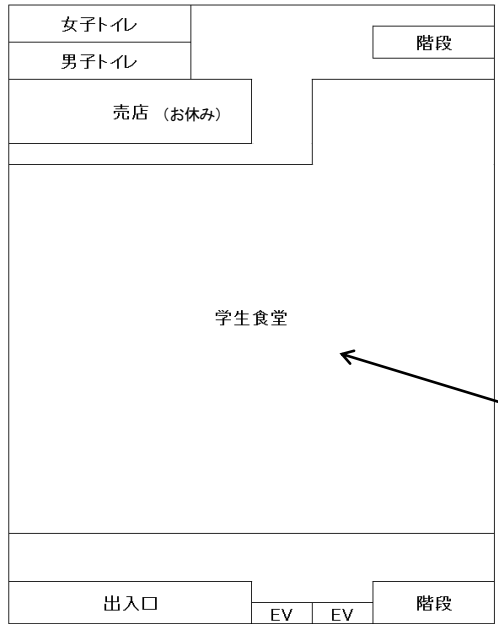
東海道・東北・上越新幹線 (東京駅) → JR 中央線 (東京駅～三鷹駅)



○キャンパスマップ

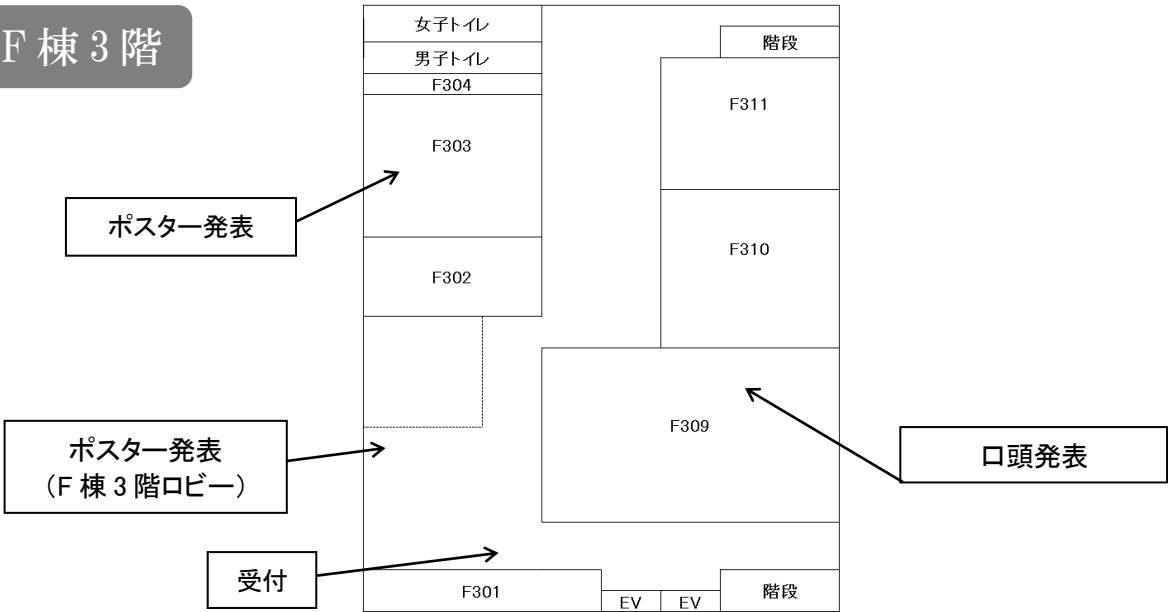


F棟1階



昼食交流会会場  
12:00~12:50  
※通常の営業はして  
いません。

F棟3階



## 【昼食について】

今回も午前のポスター発表終了後、F棟1階学生食堂にて昼食交流会を行います。ぜひご参加下さい。先着100名となりますので、お早めにお申し込み下さい。申込は当日受付にてお願いします。会費は1000円です。昼食をとりながら、参加者のみなさんと自由に楽しく交流しましょう。

正門を出て左に徒歩3分程度の場所にコンビニエンスストア（セブンイレブン）がありますが、それ以外大学周辺に食堂はありません。また、当日、大学食堂及び売店は営業していません。（飲み物の自動販売機はF棟の2階と4階エレベータ脇にあります。）

## 【会費納入のお願い】

JLEMでは4月から翌年3月までを会計年度としております。2018年度会費（3,000円）未納の方は早急に納入いただきますようお願いいたします。2年分未納の場合は会員資格を失います。会費は、会場の混雑を避けるためにも、可能な限り、事前に郵便局にて下記の口座に「電信振込」でお振込みください。郵便局に口座を持っている場合、振り込み手数料は無料になります。ご不明な点がおありでしたら、[jlem-ml#jlem-sg.org](mailto:jlem-ml#jlem-sg.org)（#は@です）までe-mailにてお問い合わせください。

- 【振込先】
- (1) 郵便局の「電信振込」で払い込む場合  
記号：10140 番号：69076511 加入者：日本語教育方法研究会
  - (2) 銀行から振り込む場合  
銀行名：ゆうちょ銀行  
店名：〇一八 店（ゼロイチハチ店） 金融機関コード：9900 店番：018  
預金種目：普通（または貯蓄） ※預金種目は「普通」「貯蓄」のいずれでも振込可能  
口座番号：6907651 口座名：日本語教育方法研究会